

海外の記録

ガネッシュ雑話

樋口 明 生

そもそも

1964年3月6日、研究所にかかって来た一本の電話が、そもそもの始まりである。

「話がある、これから行きたい。都合如何」

「OK、お待ち申し上げます」

ややあって後見人酒井敏明氏に伴われて、現役の吉野虎見、島田の3人が現われた。日頃ルームに御無沙汰している小生にとっては、後見人以外は初見参である「今度、山岳部でヒマラヤ遠征を計画しましたが、先生一つ隊長をお願いできないでしょうか」（註、先生と呼ばれたのはこのとき限り）耳寄りな話である。はやる心をおさえ、

「そうですか。ところでAACKの方はどうでしょうか」

「木曜会の推薦です」

そいつはしめた、それにしてもどうしてまたこの俺にまあよい、そのうちに解るだろう。

「小生としては是非行きたい。しかし、宮仕えの身であるから上司の許可を頂かねばならない。残念ながら即答致しかねる。許可が得られるよう出来るだけ努力はしよう。」

それを聞いて一安心という表情で彼等は引き上げて行った。後で聞くと既にめぼしい所を二、三打診して断られた後だったそうだ。小生にとっては棚からぼた餅のようなもので、1953年のアンナプルナ遠征のとき振られて以来、半ばあきらめかけていたヒマラヤ行きの夢が今実現するかも知れぬとは願ってもない幸せだ。何とかうまく許可を得られれば良いが。いざとなれば……、などと考えて何となく着落かない。

学生隊の隊長は、できれば大学の先生が望ましいということもあって、小生にお鉢がまわって来たようだ。後でゴロー（岩坪氏）に「ごたごた云うてるより助教援にでもなる方が、はよヒマラヤへ行けるでー」などとひやかされたものである。

こうしてヒマラヤへ行くチャンスが来たが、いくら何でもいきなり隊長とは少々とまどうではないか。さて俺は何をすればいいんだろう。その時から、隊長見習いの勉強が始まった。AACKの先輩・後輩をはじめ、手当たり次第に会った人からいろいろの知識を吸収するのが当座の仕事であった。いざというときになってから慌てるのは、いささか滑稽でもあったが、学生

時代からの一夜漬けの癖が未だにとれない自分を改めて認識し、今度もまた何とかなるだろうと図太く構えることにした。心配していた許可の方は、研究所長の快諾を最後にすべて頂くことができ、ここに天下晴れて遠征に参加できる身となった。

さて

現役のヒマラヤ遠征としては第二回目であり、今回は7000m級をということで、最初西ネパールにあるカンジロバ（7043m）が候補にあげられたが、キャラバンの行程が長すぎるし、その上目的の山自身についての資料がほとんどないから、現役の対象としては不向きである、もう少しアプローチの短かい、よく解った登りやすい山にしてはどうかというAACKの勧告に基づき、ダウラギリⅣ峰（7640m）が目標に選ばれた。この山ならアプローチも短かく、資料も豊富なおうえ、非常に美しい山であり、高度も十分なので、今度の遠征の目標として申し分なしということになった。

早速、登山申請書を作り、4月2日に外務省に提出した。万一不許可になった時のことを考えて、申請書には第二候補としてガネッシュ（アンナプルナ南峰、7256m）、第三候補としてランタン谷の奥にあるツンガ・ピーク（7284m）をあげておいた。一方、カトマンズ在住の神原達氏に申請書の写しを送り、ネパール政府の登山許可を取って頂くようお願いしたのであるが、その返信によると、ダウラギリⅣ峰は、J・O・M・ロバーツ氏が前から狙っている山で、彼はそのために色々準備中であるから遠慮されてはどうか、ということである。とにかく、行くことが肝腎であるから、この際、氏の言を容れて事を円滑に運ぶのが賢明であるということ、やむなくダウラギリⅣ峰をあきらめて、第二候補ガネッシュを第一候補に昇格させ、申請書を書きなおした。このようにして目標が決定されたのである。

レクチャーのことなど

上尾副隊長殿は、もう「百年も前から、何もかも御存知であるが、その他の者はヒマラヤは初めてである。より良い遠征をするためには、いろいろの事を知っておかねばならない。隊員は準備に忙殺されながらも勉強に励んだ。そのために、遠征事務所として使わせて頂いたAACKのルームでは、しばしばレクチャーが行なわれた。

高所医学の権威、斎藤ドクターには特に有益なレクチャーをして頂いた。かの地には伝染病が多いが、山にかかるまでにくたばってはつまらないから、特に気をつけるようにと注意があり、マラリアの予防にはこれ以外に方法がないから何とか云う薬を出国前から週一回確実に服用すべしとか、赤痢の危険を避けるためキャラバン中は決して生水を飲むべからずとか、親切的な講義である。また高所では酸素不足に適応するためいろいろと生理的变化が起るから、高度馴化にはとくに念を入れるようにというような注意から、持って行く薬の効能・用法に至るまで、豊富な経験に照らして丁寧に教えて頂いた。

一方、酸素不足への適応性については、この頃、防衛庁の低圧試験装置を使わせて貰って本番の前に一度テストをしてみてもどうかという話があり、親切的友人の一人が使用許可願の見本まで作ってくれたが、多忙にまぎれて果せなかったのは返す返すも残念である。ある日、彦根気象台長西本清吉氏をお招きして、「ヒマラヤの気象について」レクチャーをして頂いた。ヒマラヤの天候には周期性があることを強調しておられたが、これは後日アタックの日の天候を予想するのに役立つ。また、現地の天気予報を日本で行なうことが可能であるから通信方法さえ確保できれば送ってあげてもよいということである。登頂の成否は天候に支配されるとまで云えるヒマラヤで、本当に翌日の天気がわかるならしめたものだ。

早速、NHKへ行って、海外放送で我が隊向けの気象通報を流して頂くわけにはいかないだろうかと思ってみた。ところが「してあげたいのは山々であるが、前例がないのですわけにはいかない」という返事である。何ということだ、前例ができるまで待っていられますかい。NHKとは日本薄情協会のことか。まあいい、そんなら他所へ頼みます、というわけで、中国とインドの気象台に手紙を出した。中国の方は梨のつぶてであったが、わが親愛なるアーリヤ族は京都大学アンナプルナ隊向けに気象通報を流してくれることになった。つけ加えておけば、その担当官が美わしき女性であったということである。

「雪氷について」、これははるばる北海道まで教わりに行った。そこでは、雪と氷との違いは、中にとじこめられている空気が繋がっているか、とじこめているH₂Oが繋がっているかの違いによるとか、あるいは空から降ってきたあの小さい雪片が、どのようにして大きい氷の結晶に成長するのか、ということが雪氷学の一つの課題であるというような一般的なことから、雪の結晶の固定法、雪の断面観測法、氷の偏光写真の撮り方などの技術に至るまで親切にお教え頂いた。

サーブ紹介

バラ・サーブ（隊長）の事は省こう。

上尾庄一郎氏。上尾庄次郎の令息。親父が次郎で息子が一郎、何だか順序がおかしい。電話をかけるとき間違う人がときどきいるとか。いわずと知れた我が隊唯一のヒマラヤ経験者である。何でも「百年前から、知っているという彼氏は実に貴重な存在であった。

出発前に足を痛めて、ギブスか何かはめてAACKのルームに來たり來なかつたりした頃はほんとに大丈夫かなという気になったが、良い役者は出が遅いとはよく云ったもので、カルカッタの通関ギリギリに駆けつけたところなんぞ、見事な演出だったと云いたいところである。

彼はヒンズー語をよくし、キャラバンが始まると「アンダー・ハイ？（卵ないか）」とか「ケーラ・ハイ（バナナないか）」などと軒なみに首をつっこんで、いいことをしていたようである。我々も負けてはならじと、茶を飲みに入れば、「チニ・ポホト・チャヒエ（砂糖を沢山入れてくれ）」とか云ってザラメを少し稼いだり、終には「ジャパニカ・サーブ・タクラハイ・ゾー（日本の旦那は強いゾー）」などと、聞きかじった言葉を使いたいばかりに、云わでもがなのことを口走ったものである。

ところが、弁慶のより少し上の方であるが彼にも泣き所があって、気の毒なことにキャラバン中適当な高度まで来るとチンパをひき出すのである。しかし、ポーターに見られるのはまずいと云って、隊の先頭に立つか、そうでなければ最後尾にいるかして、決して下の連中に弱みを見せることはなかった。天晴れな心掛けである。その歩き方を見て我々は「ミニクイアヒルの子」などと笑い合ったものだ。

ドクター・ウエオの信念は、注射をしないことである。人間を痛い目に合わせるのは我が心にあらずと、もっぱら飲み薬が用意され、ビタミンなどきわめて豊富であった。彼の信念というより念願は見事成就し下痢を除いては全員何ら病を得ず、無事に目的を達することができたのである。

吉野照道君。農学部4年生、23才。少年鑑別所長の息子、通称コッペ。

彼はふだんコワイ顔をしていた。それで、「お前はコワイ顔をしてるなあ」と云うと、彼はすかさず「親父の顔を見て下さい」というのが常であった。彼によると、彼の親父は息子よりはるかにコワイ顔をしているというのである。秘かに期待していたその親父なる人に出発の前夜お目に掛ったが、なるほど負けず劣らずというところであった。

詳しいことは知らないが、今度の計画の勧進元はどうも彼らしい。もしこの計画が実現しなければ、単身ネパールに行く決心をしていたというのだから立派なものである。

遠征隊での役割は渉外係。彼は大した能力を持って

いる。先に述べたAACKの勧告があるや否や、ダウラギリIV峰の計画書を作りあげてしまし、神原情報に従いガネッシュに変更しようということになると、たちどころにそれ用の書類を作成してしまう。

山ではルート開拓に冴えた腕を見せ、最初に主稜線上に顔を出したのは彼である。見かけによらず相当な大喰いで、BCで帰りに使うポーターを待つ間、絶えずメステントの辺りで鯛茶漬など漁っていた姿が忘れられない。登頂を終えてから、ひと夜BCで祝盃をあげたとき、彼は嬉しさに酔いつぶれ、メス天から出た途端、草の上にゴロツと横になり高いびきをかきはじめた。空には煌々と満月が輝いている。他の隊員は少々心配しながらも、高所服を着ているから大丈夫だろうとか、あいつ起こしたらうるさいからさわるなどか少しは寒い目に会わせてやる方が身のためだとか云いながら、めいめいテントに帰ってしまった。翌朝、「みんな冷たい奴だなあ、云ってたこと全部聞いてたぞ」、こう彼は云ってのけた。

島田喜代男君。工学部3回生、22才。飛騨高山の産。足の早いエネルギーな男である。真夏の炎天下、彼としばしば大阪の街を托鉢に回ったが、うだるような暑さにもかかわらず彼は一目散にガムシャラに飛ばすので、こちらはもう汗だくになって付いて廻り、「おい、島田、そんなに慌てなくてもいいじゃないか」と云うと「性分ですから仕方ありません」などと云いながら、またガムシャラに歩き出してしまふ。夏のポカラでもこの調子でやったものだが、さすがの彼氏もかの地では少々こたえたようである。

隊での仕事は会計係、しめるところは適当にしめ、ゆるめるところは適当にゆるめ、結構よい会計振りであった。

山にかかってからは大ハリキリで、偵察に、ルート開拓に大奮斗であった。わけても、セラック尾根のCIV裏の氷壁でのルート工作には上田とともに大活躍し高さ10m余りの壁に立派な繩梯子をかけることに見事成功した。しかし、無理な姿勢であまりハリキリ過ぎたせいか、CIVで持病の痔がでてしまい、可哀そうなことに登頂隊には参加できなくなってしまった。

彼は俗名をケロと云う。ことのいわれは、一回生の夏山でポッカのとき、水筒の水を飲んだつもりでケロツンを飲んだことによるそうだ。それを御丁寧にも二口目で「一寸おかしい」ことに漸く気がついたというのである。

一方、彼は非常な自信家でもある。カトマンズでの或る日、自転車借りてドライブの途上、物凄美人の乗った自動車に出会った。彼はその自動車を止めて「電報局は何処か」と尋ねた。やああってその自動車と再び出会ったとき、丁度彼と小生が道の両側に車を避けた形になったが、通りすがりにその美人は彼の

方を見ていた。この事実は彼が非常によくもてるほんの一例に過ぎないと彼は説く。香港ではJALのミス何とかにもて、カルカッタではミス・ホースにもて、カトマンズではミス・サリーや自動車の美人にもて、ポカラではミス・ポカラにもて、まさにMMK(もてもてて困る)であった。人生到る処青山ありか?

木村雅昭君。法学部4回生、21才。大阪の産。わが隊唯一の文科系人物である。彼はつまらない議論をふっかけるのが趣味で、ことあるごとに人をつかまえては議論をする。キャラバン中は、連絡将校相手に絶えず口角あわをとばしていた。

彼はなかなかの英語使いでもある。英語で同じ調子であわをとばす位だから大したものだ。帰りにカトマンズで別れ際に、「樋口さんはあの英語でこれから何処かへ行くんだから大したものだ」などとひやかす位大した実力である。

カルカッタで荷物の到着を待っていたある日のこと彼は今度の遠征のために初めてガスライターなるものを手に入れたのであるが、それがあまり上等でなく、ガスがもれて困るとボヤいていた。悪い奴が居て、パンクの時チューブを水につけて検べるように、ライターを一度水につけて見たら、と教えた。そこは文科系の悲しさで、早速実行に移したのである。気の毒なことに、彼のライターはその後さらに調子が悪くなったのは申すまでもない。

隊での仕事は装備係。出発までの装備の調達から梱包、発送など、なかなか手際よくやってのけた。ベースキャンプに着くと早速荷物の仕分けをし、高所への荷上げの段取りをする。他の隊員達は彼の命令一下、ザイルの捲きなおし、赤旗作り、ラジウスのテストなどやらされた。山にかかってからは、ケロツンの消費が予定をオーバーするので、毎夜テントの中で残余の計算に頭をかかえていた。

偵察に、ルート工作に見せた彼の實力は高く評価されてよいものである。これはガネッシュを終えてからケロとテント・ピークの試登をしたときにも遺憾なく発揮され、見事初登頂に成功したのである。

上田豊君。理学部3回生、20才、最年少。別名ポッポ。悠揚迫らぬ所があると同時に、非常な感激家である。地理不案内な東京で、お天道様を頼りに歩いているかと思えば、先発隊の見送りの際、船がテープを引きずって動き出すと、酒の酔いも手伝ってか感極まり今にも泣き出さんばかりになったりする。

キャラバン中のある日、その時は確かお天道様がかくれていたと記憶するが、我々よりずっと先行した筈のポッポに、後から声をかけられた。「何だ、前を歩いていたのじゃなかったのか」と云うと、「それがねえ、道を間違ったんです」という事であった。やはり出るべきものが出ていないと具合が悪いようである。

隊では食料係を勤めた。丹念な食料計画のもとに、かなりバラエティに富んだ御馳走を提供してくれた。キャラバン中はコックと行動を共にし、鶏、卵、野菜などの調達に忙しく、BCでは羊を買いに走るなど大いに張切っていた。

山では木村と同様に、偵察に、ルート工作に尽力したが、とくにCIV直上の氷壁ではケロと共に大奮斗しあの難かしい所に立派な繩梯子をかけるのに活躍した。

彼は学術調査にも大張切りで、デブリの調査、雪の断面観測、海塩核の調査などにおいては、小生のよき協力者であった。とくに、海塩核の定時観測の際は、他の隊員が遊んでいるときでも、彼はテントの外で、採取作業を一人熱心にやっていた。

以上合計6名の平均年齢は24才である。これは7000m級の初登頂に成功した中では最も若い隊であろう。鹿島立ち

7月10日に在インド、ネパール大使館から正式の登山許可を得て、いよいよ出発である。準備は完了。

当初、隊員と荷物はカルカッタまで船で運ぶ計画であったが、適当な船便がなく、先発隊(吉野、島田木村)は香港・カルカッタ間は航空機を利用した。それでも、日本を出るときは船で、神戸港では盛大な見送りをした。インドラ隊の寄贈で清酒「日本盛」の樽詰めが持ち込まれ、ラオス号の繋がれている岸壁では賑やかな酒盛りが始まった。栓を抜いて柄杓で飲む間はよかったが、そのうち樽を抱き上げて、じか飲みが始まった。炎天下での冷や酒のお飲みもまた乙なものである。あらん限りのドラ声をはりあけての雑唱に、あたりの人々は驚き見とれている。まさに「歓呼の聲に送られて、今ぞいで立つ父母の国」という調子である。この頃になると、デッキも、岸壁も黒山の人ばかりで、何だか世界中の人に見送ってもらっているような感じであった。

8月12日に小生が羽田から、翌13日に上田が横浜から、最後に23日に上尾が羽田から無事日本脱出を終えた。

日本を出れば遠征隊は半分成功したようなものだが、とよく云われるが、飛行機に乗った時は真実ホツとした思いであった。

飛行機というもの

今度の遠征が楽しかったのはやはり初めての経験づくめであったためであろう。飛行機に乗るのもその一つであった。大体、あんなに大きいものが飛び上るのだから驚くほかはない。しかも、ジェット機であれば数分の間に1万メートルまで上って終うのだから、馬鹿みたいなものだ。7256mの頂上まで、何か月もかかって登ろうというのに。

もう一つの驚きは飛行機がはばたくという事である。今の飛行機は金属でできているから固いものだと

ばかり思っていたが、それが実はあまり固くはない。主翼の見える座席に坐っていると、固いはずの羽がブヨンブヨンとたわむのが見え、妙な具合である。じっとしていると何だか心細くなって来る。あんないい加減なものでは、強いエヤーポケットにでも入れればフチャッと曲ってしまうのではないかという気がする。パンコック辺で、強い雷雨に会い、機体はかなり激しく揺れた。残念ながらその時は夜でよく見えなかったが落ちなかったところを見ると、どうにか無事だったようである。

英語の電話

宿も決めずに出発し、さて香港では何処に泊ろうかなどと考えながらパンフレットに目を通して見ると、隣席にいた黒眼鏡のお兄さんが話しかけて来た。彼はJALの香港支店に勤める中国人で、休暇に東京へ遊びに行った帰りということであった。結局、その人の紹介でパレスホテルがその夜の宿になった。

さて、部屋に通されたが、する事がない。一つ、ベベ(笹谷)商会に電話でもしよう。英語でかけるのは億劫だが、やむを得まい。交通公社でくれた日常会話の本を開いてみる。「……………」。「……………」。なるほど上手に書いてある。しかし、相手がこの通りの返事をしてくれれば申し分ないが、さもない一寸調子が悪いな。まあ何とかなるだろう、ともかくかけてみよう。勇気を出して、受話器を取り上げた。内線だから交換嬢が出る。「何番お願いします」、「はい」。「ハロー、ベベ商会ですか?」、「そうです」、「こちら京都大学の樋口と申しますが」、そこまで英語で云うと、今まで英語だったのが、「モンモン」と日本語に変わった。何だ、日本語が通じるじゃないか。案ずるより生むは易しとはこの事だ。通じる筈である。相手は歴とした日本人後藤氏であった。

臭い町

夜、カルカッタはダムダム空港に着いた。飛行機から出た途端、何とも云えぬ妙な臭いが鼻をついた。何の臭いだろう。動物園かどこかで嗅いだことのあるような臭いである。大体、臭いというのは測る尺度がなく、何とかのような臭いとしか現わせないのは不便である。ところで今臭っているのは一体何のような臭いと云えばよいだろう。ともかく、変な臭いである。この瞬間から、カルカッタは臭い町という印象が刻み込まれた。その後いろいろ研究してみたが、今もって何の臭いか不明である。

先発の3人に迎えられ、雨の中をアンバサダーと云う立派な名前のボロ車でリットンホテルに向った。石油ランプでおぼろげに照し出された道は半分水浸して雨に濡れながら半裸の人々や、二頭立ての牛車が行き交っていた。

ある日、ダイヤモンドハーバーへドライブとしゃれ

た。港の近くではココナツを売っている。早速試飲してみたが、大してうまくない。そのうちに、子供がぞろぞろたかって来たので並ばせて写真を撮った。皆機嫌よくここにこ笑いながらカメラに納まってくれた。さて、それから一騒動である。というのは、撮り終ると同時に子供達は全員かけよって来て「ボックス、ボックス」である。モデル料をよこせ、という事らしい一瞬呆気にとられた。しかし、彼等にとっては当然のことのようだ。結局この時は、運転手が助けてくれたが、かわいい顔をした子供達が金を寄せせというのは何となく後味が悪く弱った。

しかし、インドでは貧乏人がサーブから金を貰うのは当り前のことで、全然お礼を云うべき筋のものではないらしい。人に金をやる身分であることに感謝して、貰って頂いた事に礼を云えというような態度である。金をやると一言の挨拶もなしに立ち去る。もっとも我々にはできるかぎり金を出さずにすませることにしていたので、しばしばいつまでもつきまとわれる羽目におちいった。

小ネパール

カルカッタから乗ったおんぼろダコタ機がガンジスの濁流を渡り、インド大平原に別れを告げて緑の山なみを飛越えると、間もなく美しいカトマンズ盆地が開けてくる。

中央は聖なる川バグマティが流れ、緑の山の向うから白い山々がのぞいていることを除けば、京都盆地によく似たところだ。ここは小ネパールとも呼ばれ、その昔、蒙古族がヒマラヤの難関をこえて南下し、住みついた所と云われている。多分そのせいであろう、行きかう人々は我々と同じような顔つきが多く、親しみ深い。

カトマンズにはお寺が多く、仏教とヒンズー教とが混っていて、それぞれ違ったたたずまいを持っている。仏教の一番古いお寺と、一番大きいお寺とが町の西と東にあり、いずれも四角い塔を上にした大きな土饅頭が中心になっている。その塔の四面には四方を見通す目が描いてあり、四天王の一人「広目天」の目のように遠くを睨んでいる。奥の僧院では笛や太鼓を鳴らしながら賑やかに勤めをしていた。仏像は極彩色で美しく、日本の作びた感じとは程遠く、もっと人間臭いものを感じさせる。

ヒンズー教の一番格式高いお寺には、我々異教徒は入れて貰えない。バグマティ河に面した高みにあり、丁度金閣寺のように屋根は金張りである。門番が警備している横から覗くと、金色の大きな牛の像が見える。牛は聖なる動物である。前の河には洗濯場のようないくつかの張り出しがある。これは火葬場だそうだ。聞くところによるとヒンズー教徒は家の中で人が亡くなるのを嫌い、病気が重くなり余命いくばくもなくなる

と、お寺の隣りにあるWaiting Houseに入れられ、こと切れるとこの洗濯場でだびに付すのだそうだ。そして、灰を河に流せば万事終了ということであった。きわめて合理的ではあるが、いざお前の番だと云われた時にどんな気がするだろうとふと思った。死んでからでも階級は生きていて、いくつか並んでいる洗濯場のうち、上流にあるのは偉い人の分だそうだ。その上上等になると屋根まで付いていた。

ある日、オリンピックの松明がカトマンズに着いた。その夜、盛大な聖火歓迎の催しが行なわれ、ふとしたことから小生も招かれた。ネパールの民族舞踊など見せて貰ってから、カトマンズで一番立派なホテルでの晩餐会のお相伴にあずかり、親しくネパール国第三皇子と握手を交わすことができたのは光栄であった。半月近く安宿で単調な中国料理ばかり食べさせられていたので、久々に本格的な西洋料理が出たのには感激した。向うの人達は「折角日本であるのに、オリンピックの時にこちらに居られるのは残念ですね」と御世辭を云って下さるが、こちらはオリンピックどころではなく「だからこそ、ヒマラヤへ逃げて来たのだ」と云いたくなくなった。

ポカラ

ポカラの朝は素晴らしいの一語につきる。少し早起きをしてホテル前の飛行場に出て見ると、北側にガネッシュ、アンナプルナⅠ峰、マチャプチャリ、Ⅲ峰、Ⅳ峰、Ⅱ峰、ラムジュンと7000~8000m級の山並みが丁度屏風を立てたように立ち並んでいる。朝日が昇り出すと今まで眠っていた山々は眼覚め、茜色に色づき始める。ヒマラヤ麓が美しい。神々しい景色に思わず身のひきしまる思いがする。飛行場は牧場と兼用で、牛、水牛、羊などが群れており、彼らの影がずっと西にのびている。はるか西の方の山あいにはダウラギリらしい白い峰がのぞいている。

キャラバン開始

ネパールの飛行場で滑走路の舗装されているのはカトマンズだけで、あとはただ平らであるというだけの所だ。我々の荷物は、ノータンワからバイラワに入りここからポカラまで空輸する予定であったが、バイラワは低地にあり、飛行場は泥田のような所あって一度雨が降ると三日位使えないというなげない飛行場である。八月の終り頃というはまだモンスーンが明けず、いじわるなことに三日に一度位の割合で雨が降るのである。

そうなるも飛行場にはどんどん荷物がたまり出し、遠征隊の荷物をいかに早くポカラに運ぶかということが大問題になる。カトマンズ、ポカラ、バイラワでは毎日無電で連絡をとりながら隊員達はそれぞれ飛行機会社に日参し、交渉を続けた。結局、9月8日に予定よりも10日程遅れて空輸することができ、夕方シェル

パー人を除く全員と荷物が勢揃いした。

一方、グレンシア・ドームをねらう千葉山岳連盟隊は一足先にバイラワで順番待ちをしていたため、朝の便で荷物を空輸し終えていた。彼等のベースキャンプ予定地はわれわれのすぐ隣りであるから、三組のキャラバンが相前後して同じ道筋を辿ることになる。後塵を拝するのはわが意にあらず、ということになり、翌朝出発することに決定した。さあそれからが大変である。荷物の仕分けをするもの、ポーターを備えに行くもの、食糧、燃料を仕入れに行くもの、テンヤワンヤの大騒ぎが夜半まで続いた。翌日も早朝から荷物の仕分けの仕事が続き、予定より少しおくれたが9時半頃にキャラバンを開始することができた。

山旅

キャラバンの朝は「サーブ、お茶」で明ける。寝袋から顔だけ出して、タップリ入ったミルクティーを飲みほす。煙草を一本喫い終ってからテントを出る。シェルバテントではもう食事の用意ができています。

ポーター達は、とうもろこしの粉を水でねって火にかけ、糊のようにしたものをしゃがみこんで食べている。たまにタカノツメなどを一緒に食べている者もあるが、大抵はおかず無しである。あれでよく40キロもの荷物を担げるものだ。

隊員のテントをかつぐポーターを最後に一日のキャラバンが始まる。サーブ達はボロシャツに半ズボン、サブルック一つという軽装で調子がよい。連絡将校のキャプテン・ラナは駿足である。彼は隊員の誰かをつかまえては、しゃべりながら猛烈な勢いで歩いている。

モディ・コーラ最奥の村チョムロンに着く。ここで問題が起った。というのは、ここから上は聖域であり神々の住いである。したがって、階級の低い者や女は立ち入り厳禁である。もし入るようなことがあれば神様の怒りに触れ、きっと面倒なことがもち上るであろう。また、聖域では殺生をつつしなねばならないから鶏もたくさん売るわけにはいかない。今夜の分だけだけがまし。その上、聖域に入るからにはそれに見合うだけのお賽銭をあける、などという。この際、なるべく村人を刺激せず、穏便に済ませた方がよからうということになり、できるだけ彼等の言う通りにした。ただ、お賽銭については帰路改めて話をしよう、ということでも何とか通り抜けた。

この辺りから連日雨で、蛭になやまされた。彼等は下草の裏側や濡れた岩の上で我々の通るのを待ち構えており、足が触れるや否や吸いついて来る。そして足首の処から靴下の中に潜り込み、血を吸う。目の粗い靴下をはいているとときめんである。南アルプスで成功したことを思い出して、ズボンの中にDDTを入れてみたがあまり効き目がない。婦人用のナイロンストッキングが有効だ、などと云い出したが後の祭りであ

る。一度吸われると、その血の臭いを嗅ぎつけるのかたくさんは蛭がそこに集中してくる。そっと靴下をめくると、一カ所に十位たかかっており、それにはぞつとさせられる。素足のポーター達は、気の毒にも足を血まみれにして歩いている。それでも彼等は馴れたもので、先を斜めに切った長目の竹を持って歩き、蛭が吸いつくと荷物を担いで立ったまま器用にそのへらでこそげ落していた。終り頃には少し馴れたが、この蛭の攻撃はベースキャンプまで続いた。特に夜寝る時は脅威であった。隊員共はくやしきまぎれに、如何に残酷に蛭を殺すかということに腐心し、ガスライターで燃やしたり、石ですりつぶしたり、まとめてピースの空缶で蒸し焼きにしたりして憂さを晴らしていた。

最後の泊り場はヒンコーであった。快適な岩小屋であるが、もう標高は3000mを越えているのでかなり寒い。その上雨に濡れている。寒いのと、腹がへったのと、裸同様のポーター達は怒り出し、もうこれ以上上へは行かないと怒り出した。ナイケ(ポーター頭)がカンカンになってどなっている。サーダーのバサンも同じようにどなっている。おどしたり、すかしたりなだめたり、いろいろの手を使ってポーターに応待している。そのうち、夕食の用意ができて暫らく休戦。食事の時よく聞くと、チョムロンで雇ったポーター共が、ここから上は流れの急な渡渉箇所が多いとか、道が非常に悪いとか云って、ポカラから来た連中をそそのかしているらしい。こういう問題は全てサーダーに任せてあるから、我々は部外者のようなものである。小柄でおとなしそうなバサンも、ポーターの前ではうんと強気で堂々としており、さすが名サーダーの名に恥じない。結局この問題は、いやな奴は帰れ、ということになり、実際ここで何人か解雇されたが、食後ナイケがテントに入って来て、上まで行きますということでケリがついた。

ベースキャンプ

標高4000m。アンナプルナ南氷河側谷の中に建設。西にはガネッシュがデンと腰を据え、南にはヒウンチュリが頭上に迫り、東にはモディコーラをはさんで世界で一美番しい山と云われるマチャプチャリが聳え、北にはモレーンの上にアンナプルナの主峰が白く輝いている。まさしく聖域である。ガネッシュは氷河をまとい、急傾斜の氷壁に守られて少々手ごわさうである。まわりは緑の草原で羊飼いの小屋も二つ三つ点在する。食糧係りが連絡将校と一緒に羊を買いに行き、モリモリ肉のついたのをひっぱって帰って来た。その夜はジンギスカン料理であった。

雪崩れ(その一)

我々はこの山行でしばしば雪崩れに遭遇した。その第一幕。時、9日21日午後2時、所、アンナプルナ南氷河上、ルートに使った草付き尾根の末端付近。

ほとんど全員でポッカシ、CⅠを建設しての帰り道、どンドン飛ばして下りて行くシェルパについて引きずられるようにして急な草付きを下ったが、足が痛くなって南氷河に下りる直前でサーブ3人(ジャン、ケロ、ポッポ)は少々昼寝をした。シェルパ達はさきに氷河に下り、デブリを横断して先日までデポ地になっていた小高い所で休んでいた。「行こか」とジャン(樋口)が声をかけ、全員起き上り、ポッポ(上田)に登りに作ったバケツを伝ってデブリの上を下り立った。ポッポは一番後から下りたが、下りきるや否や何を思ったか一目散にシェルパの方に向かって走り下って行った。ジャンは急な草付きの下りで痛めた足をひきずりながらチンバを引き引きゆっくりとデブリの上をトラバース気味に下っていた。ケロ(島田)はその後に続いている。中頃まで来たとき左の方(上部)で雷の鳴るような音が聞こえた。右の方からは、ガネッシュ氷河の合流点でセラックの崩壊による音がしょっちゅう聞こえてくるが、左の方からは初めてである。デポ地から正面に見えるゴルジュに雪崩が起ったのかと思った。それにしても音が長く続くなど思っていると、先に渡り切っていたシェルパがピーッと鋭い口笛いた振り返ると、津波のような氷の流れが、すぐそこまで押し寄せてきているのではないか。慌てた。足の痛いのも何のその、走った、走った、何も考えずに。かなり走ってもういいだろうと振り返ると、前より近く、ほんの2、3メートルの所から氷がおおいかぶさって来るのではないか。これはいかん。走れ、走れとばかり闇雲に走った。100m 8秒位のスピードで。ポッポが前に見えた。「ケロはどうした」「大丈夫です」との答えに正直助かったと思った。命拾いだ。安全地帯まで逃げのび、振り返ったが雪崩はまだ動いている。粘性の大きい流体のようだ。止まるのを見とどけてホッとしたり。それにしてもよく走ったものだ。咽喉がかわいて、うまくものが云えない。一休みしてシェルパ共の見物席に行き、ニコニコした顔に迎えられた。

よく見ると、もう一つ上の谷からも同時に雪崩が出ている。かなり大規模なものだ。我々を襲ったのは、草付き尾根の右側の谷、先刻までは水がチョコチョコと流れていただけの谷から出ており、草付きに沿って右に折れ、扇状に拡がっている。どれだけ走ったかよく判らないが、デブリの半分は走っただろう。ケロは、少し早く気がついたそうである。デブリの真中で雉を打とうとして、ベルトを弛めた途端に音がしたので振り向くと、谷から雪崩があばれ出て来るころだったそうで、彼はズボンや落ささないよう引っぱりながら必死で走ったという。

ポッポはほぼ横断し終る頃に雪崩に気付き、ジャンとケロが必死に走るのを見ていた。やきもきしながら両手で目を覆ったり、聞いたり、自分も逃げたり、ま

た目を覆ったり……。[ケロはんもこれで終りか]「この遠征もこれで終りか」と思ったという。

この地点については往路に少し懸念はしたが、デブリは真黒でかなり古く思えたので、まず大丈夫と考えていた。仰ぎ見ると、大きな氷塊がスラブの上に乗っており、少々の危険は感じたが、落ちてくるまでに壊れてしまいうら位に考えていた。結局上部の地形判断が甘かったわけで、実はこの小さい谷は懸垂氷河の下部に漏斗状に開いており、氷河の崩壊した氷をかき集めて流す樋の役目をしていることが後に判った。

BCに帰ってからも雪崩の話でもちきりであった。夕食のときシェルパは、「サーブは死んだと思ったか?」と聞くと「イエス」と答えられてしまった。

雪崩れ(その二)

時、10月2日、午後1時頃、所、ガネッシュ氷河中流部。

CⅢの位置が決まらず、いらいらしていた。前の偵察したククリ尾根のさらに上部を見ようと偵察が繰り返されていた。ククリ尾根に取付くには標高差200m位のデブリ地帯を一気に通過しなければならない。ジャン、コッペ、ミンマの3人は、そこを通過していると、大雪山崩に会い、右側のセラック尾根に逃げた。どうも物騒である。雪崩が終ってからも、直径数メートルもある落石が続いている。昼食をとり、意気沮喪して下りにかかる。デブリ地帯を通過して一息ついていると、上の方で「ボン」と異様な音がした。見上げると稜線近くで雪煙が上がり、それが猛烈な勢いで氷河を駆け下りて来る。丁度入道雲がもくもく上るのを上下逆にし、スピードをはるかに早めたような具合である。千載一遇の好機逸すべからずとばかり、8ミリカメラを取出す。コッペもカメラを出している。「逃げるとき、云ってくれよ」と云いおいてカメラを回す。雪煙雪崩であるからたいしたことはあるまい。できるだけ近くに来るまで映画に納めてやろうと思って撮り続けたが、すぐに「もう逃げなあきませんわ」と声がかかる。ファインダーから目を離して驚いた。雪煙はすぐ目の前まで来ているのではないか。またもや逃げた。3人共必死である。ほんの20メートル程走った頃、もう雪煙に追いつかれた。爆風を伴った猛烈な地吹雪である。コッペが足をとられてうつ伏せに倒れ、また慌てて駆け出す一幕もあり、三人三様大いに逃げた。地吹雪がおさまり、みな一ふるいブルブルと震って、大いに驚いたさまを語り合った。雪崩の本体が我々にまで届かなかったので助かった。それにしても大いにキモを冷やし、体を冷やし、頭を冷やした。

雪崩れ(その三)

10月9日、時刻不明、CⅢ付近。ククリ尾根下部のデブリ地帯を早朝に通過するため、セラック尾根末端の足元にCⅢが建設された。その日CⅣへの荷上げを

済ませてCⅢへ帰ってくると、何となく様子がおかしい、よく見るとテントの両側がデブリに覆われている。懸念していたセラックがとうとう崩壊したらしい。幸いなことにCⅢそのものはやられていない。実は昨日夕食の時にセラックの基部が崩壊して雪崩が起り、ミンマの警報でコッペと3人で、テントから逃げだしたのだったが、我々の地形判断によると、もっと大規模な崩壊が起っても大丈夫という結論に達していたのである。CⅢは少し高みに張ってあったので、デブリはこれを避けて両側に分かれている。最も近いものはテントから3メートル位の所にブロックが転がっており北側には直径十数メートルの巨大なブロックが滑ってきている。テントの上側にある幅5メートル位のクレバスは、雪崩の通り道だけは完全に埋まっている。デブリは直径数センチの氷をザラメ雪でとじこめた、丁度粒船のようなブロック(直径数十センチ〜数メートル)と、青氷そのもののブロック(1メートル以下)と、ザラメ雪とからなり、不気味な様相を呈している巨大なブロックの通った跡は深くえぐられ、樋状になっている。このブロックがクレバスを越える時、クレバスの上端の雪を押して来たらしく、ブロックの前面は三角形に新雪が盛り上っており、よく見るとその中にツララのついた小さいブロックが含まれている。それにしても、我々の地形判断はきわめて(ギリギリ)正しく、予想通り「まず大丈夫」だったわけである。我々はこの雪崩が留守中に起ったことに感謝した。もしテントに居る時、しかも夜中に起っていたら、どちらに逃げるか迷ったあげく、雪崩の中心に向かって逃げたかも知れないからである。

一番嬉しかった時、一番心配した時

10月13日、吉野、木村、上田の3人がCⅣから頂上を目指して出かけた。小生と上尾とはCⅣで刻々入る無電を聞きながら一喜一憂していたが、最後の雪庇を乗り越えて稜線に出たという報が入ると一安心した。というのは技術的な困難は全て稜線に出るまでにあると見ていたからである。彼等からの通信によれば、稜線に出たところからはどれが最高峰かわからない、という。無理もない。コルから似たような高さのピークを比較せよというのがそもそも無理というものだ。ともかく南峰(アンナプルナ南峰)だから南へ行けということになった。

ガネッシュは、明らかに独立峰と見なせるが、その稜線は南北に長く、幾つかのピークをもっている。我々はそれらを南から南峰、中央峰、マイナーピーク、北峰と名付けたが、近くから見るとどれが最高峰かわからない。出発前にカトマンズで、J.O.M.ロバーツ氏に聞いた話では、南峰が最高峰だということであった。というようなわけもあって彼等は南へ向った。

稜線へ出ればもう困難はないとは思っていたものの中央峰登頂に成功したとの連絡が入った時はやはり感激して、CⅣにいる連中は思わず握手を交した。うれしい。とうとうやった。交わすべき酒がどこまで上っていないので、やむを得ず紅茶か何かで乾盃をする。シェルパもうれしそうである。バラ・サーブもずっと肩の荷が下りた思いである。

彼等は1時間ばかり頂上において下りにかかった。ところが、それからが大変である。というのは、ルートは主稜線の東側にあるため、三時を過ぎると陽がかけり、雪は再び凍り始め、急斜面の下降は極度に困難となる。一時間毎に交信するが、「今何番目のフィックスの所にいる。全員元気」とか「どこそこで、フィックス工作中。全員元気」という返事である。傾斜がきつくとワン・アット・ア・タイムで行動せねばならないので、手間どる。「がんばれ」「気をつけて下がれ!」「慎重に降りろ!」などと送信する。ここで事故を起されたら大変である。八時頃まで出た月もかくれてしまった。真っ暗な中で彼等はよく頑張っている。五回目の交信の時、もうCⅤのすぐ近くまで来ているという知らせを受け、無電機をつけっぱなしにしておく九時半、「CⅤに帰りました」との報にホッとした。これで初登頂も無事終った。

マイナーピーク

10月15日、上尾とミンマは南峰へ、小生とカルマは北峰へ向った。第一次登頂隊が立派な道をつけておいてくれたので、仕事ははかどる。最後のフィックスを使って巨大な雪庇を乗り越え稜線に首を出す時、冷たい風とダウラギリが迎えてくれた。続いてカルマが上ってくる。一休みして北峰に向って歩きだす。北に向う稜線はあまり広くはない、東西はほとんど垂直に近い。ところどころにコブがあり、そのコブの所は両側共きわめて急傾斜である。二つ目のコブに着く。マイナーピークである。東側をカルマが越えかけたが、「行けぬ」という。交代してのぞくと、なるほど垂直に落ちている。両側の急斜面ならどうにか通れそうではある。ここでハタと思案に暮れた。「行くべきか、行かざるべきか」

悩みの種はこうである。ここから北峰までは少く見積っても3時間はかかるだろう。だから、帰路稜線からの下り口に着くのは5時頃にはなってしまうだろう。そうすると第一次隊の二の舞を演ずることになる。あれは繰り返すべきではない。さりとて、日帰りで何とかなると考えていたのでビバークの用意はしていない。せめてトランシーバーでもあれば、南峰に向っている上尾らのビバーク用具を下り口にデホしておいてもらうことも可能だが、いまはそれもならず。用具なしの7000mでのビバークを頼りに行動するのは賢明とはいえない。第一次ですでに3人が登頂し、今4人目が最

高峰に向っている。彼等は間もなく到達するであろうここで5人目が不確実なビバークの危険を犯してでも行くべきであろうか。『安全第一』、このお題目が少々邪魔である。

結局、ここから引き返すことに決心した。そう伝えるとカルマも残念そうである。仕方がない。ヤケタバコでも吸って、昼寝でもしよう。ここも頂上の一つだ。

こうきめると急に気が楽になった。

ここからの眺めは、素晴らしい一語につきる。いままで仰ぎ見ていたマチャブチャリも、もう足下になり稜線に出たとき迎えてくれたダウラギリは毅然とした姿で立っている。北には人類最初の8000m、アンナプルナ主峰がデンとひかえており、それから東にグレースアドーム、ガンガブルナ、Ⅲ峰、Ⅳ峰、Ⅱ峰と続いている。1953年に今西さんと藤平さんが苦しい思いをされたのはあの辺りだろうか。

南峰の上ではすでに到着した上尾達が、写真でも撮っているであろう、小さく人影が見える。

永河円屋根峰 (Glacier Dome)

我々のBCの近くには、千葉岳連隊がBCを作っており、10月16日グレースアドームの初登頂に成功した。CI撤収の日、そこを訪れると食糧が残り少ないとかで元気がない。幸い我々の方はポッポサーブのお蔭で、まだかなり潤沢である。そこで相談の結果、彼等を夕食に招待しようということになった。しかし、ただ「おいで下さい」と云うだけでは面白くない。一つ招待状を出そうじゃないかというわけで苦心の末、次のような招待状ができた。

御招待状

貴隊の氷河円屋根峰と、当隊の安難勿^レ振南峰の初登頂を祝し、下記により記念晩餐会を催したく、ここに謹んで御招待申し上げます。御多忙中とは存じますが、万障御繰合せの上、何卒御出席下さいますよう伏して御願い申し上げます。

記

日時 自昭和参拾九年拾月貳拾壹日午後四時
会場 狂徒大学根張暇来也遠征隊基本幕营地
(老万貳千八百尺)

御献立

- 一、前菜
- 一、水腹(スープ)
- 一、真茶(マチャはネパール語の魚)
- 一、畜肉
- 一、其他

麦酒乾盃予定(但、到来品ある場合)

これをウイスキーの空箱に書き、赤旗用の竹竿の先を割ってさみ、差し出す時の所作を教えてキッチンボーイに持たせてやった。暫くして彼はトイレットペーパーに長々と書かれた御礼状を挟んで帰って来た。

それから全員腕によりをかけて御馳走を作って彼等を迎えた。話ははずみ、夜の氷河に歌が流れた。マチャブチャリからの月が出て夜空に冴えていた。

茶店

ビレタティからポカラへの道は国道2号線といった所か。ところどころに宿場があり、ホテル、食堂、喫茶店がある。試みに入って見る。蠅が舞っている。薄暗い土間の角に蕨が敷いてある所が座席である。お茶を注文すると、昔ジャムを入れるのに使ったような厚手のガラスのコップの、くもったやつに入ったミルクティーを蕨の前の床においてくれる。一ぱい25パイサ(約13円)である。店によっては水牛の肉の燻製、ゆで卵、とうもろこしなどを売っている。その上、ロキシーまで。帰りのキャラバンは楽しい。身も心も軽く、つぎつぎと買い食い、買い飲みもする。なかなか調子がよい。シェルパ共はしようのないサーブ達だとしても云いたげに、茶店をのぞきこみながら通り過ぎて行く。

ポカラに近くなった頃、チベットの難民部落の前を通った。すぐ横に茶店がある。この部落の気のきいた者が店を出しているらしい。屋根も柱も壁も全部竹製である。ここで茶を飲み、煎餅を噛っていると柱にかかったチベット刀が目に入った。売るか、と聞くと、50ルピーならと答えた人相のあまりよくないおやじである。30ルピーでどうだ、と値切りにかかる。45、48、42、と少しづつ下げてきて、40ルピーでどうだ、これ以下では売らない、と云う。結局40ルピーで買った。よい買物をしたと大威張りして、バスンに追いついて見せると、「高々30ルピーの品です。これからは、買物をする時にはミンマを連れておいでなさい」と、たしなめられた。

水浴び

ポカラにはベワタールと云う大きな湖(ダムの人造湖)がある。ポカラ何景とかの一つで美しい所である。ある日、そこへ泳ぎに行った。ホテルの庭に張ったテントから15分ほどで湖畔に出る。シェルパ達も山で汚れた我々の衣類の洗濯をするためについて来た。来て見ると水はあまり美しくはない。その上、よく見ると水牛が首だけ出して水につかっている。一寸気味が悪い。それでも、折角来たのだからと、できるだけ上流まで行って飛び込んだ。もと水泳選手などと云い出す者もあり、結構楽しかった。所かわれば何とやら、おっかなびっくり水牛と一緒に泳ぐのも、ネパールならでは、という所か。

カトマンズ以後

11月11日、舟橋氏がカンチェンジュンガ遠征の件でカトマンズに來られた。小生は協力を依頼され、交渉のためシッキムに入るべく、ダージリンに飛んだが許可が得られず、カルカッタに戻り、デリーで折衝中の氏と連絡をとりながら再びカトマンズに行った後、12

月3日にデリーで氏と再会した。帰国される氏の後を引継ぎデリーに滞在した後、ルルキーおよびブナーの研究所を訪問し、12月19日、羽田に着いた。

上尾は、パキスタン、アフガニスタンまで足をのばし、12月23日帰国した。帰路、カルカッタで偶然一緒にバンコクの京都大学東南アジアセンターを訪れ、お世話になった。

現役の連中は、二組に別れて旅行に出かけた。外国人がネパール国内を旅行するには、外務省の許可が必要である。チベットの国境線から25里以北は、外国人立入り禁止区域なので、暖めていた計画の許可はなかなか貰えず、結局、計画を変更して、なんとか旅行許可を得て出発した。

吉野・木村隊は再びポカラに引き返し、待っていた

ダッハシュタイン

広瀬幸治

京都から時報に何か書くよという御注文であるがこの頃は日常の俗事に追われて、AACKの諸氏にお伝えするような話もなく、この7月にオランダにいる寺本と一緒に登ったダッハシュタインのことも書いてかんべんしていただくより仕方がない。

ダッハシュタインというのはオーストリア、ザルツブルグの少し南にあり、ティローラーアルペンの東端高さ3000m±3mという大変だが、地図によって高さが異なり、どれが本当か知らない。おそらくオーストリア山岳会発行の1/25,000の2997mというのが正しいのではないかと思う。案内書によると「やや困難、めまいのする者は行くな」とある。その意味は登ってみてわかった。

もっと近いところにもう少し名の知れた山がたくさんあるのになぜデュッセルドルフから800kmも車をとばしてこの山に登りに行ったか、という理由がどうもはっきりしないが、去年の12月にやはり寺本とこの近くにスキーに行った時、実はスキーはほとんどせず、もっぱら山見物に終始したのだが、この山をみて「ダッハシュタインはええ山や」ということで両者の意見が一致して以来、夏山はこれに決まってしまった。このほかにわれわれの旅は、ドロミテへ行ってドライチンネをみようというもう一つの目的があった。ドライチンネはとも登る元気はないから見るだけである北側からダッハシュタインに登るには、まず北側の谷間にあるハルシュテッターゼの峯から、称名の坂を3つつないだような道をがつつ登ってシモニヒッテ

カルマを連れて、ダウラギリ周辺の旅に出た。初めの計画はダウラー一周であったが、北側の通行許可が得られなかったため、カリガンダキ沿いにトウクチエに出て、ダンブッシュ峠を経てフレンチコルまで往復し、ついで南からマヤンディコーラに入り、ダウラギリの南面を見て、カトマンズに戻った。その後、カトマンズからタルケギャン経由、ガンジャ・ラを往復している。

一方、島田・上田隊はノルブを連れて、まずランタン谷に入り、ガンチェンボに近づき、次はチリメ・コーラからパンサン・ラを越えてブリ・ガンダキに出てサマに達し、ラルキヤ・ラを経てトンジエに出て、ポカラ経由で1月6日カトマンズに帰った。

4人は2月19日に揃って羽田に着いた。

に行かねばならぬ。トレーニング不足の身にはこれがあまりありがたないが、幸いに少し遠まわりになるがケーブルカーを利用して高さを3分の2ぐらいかせぐことができる。ケーブルの終点のレストランで昼食を食い、同時にビールを飲んでほろよいきけんで歩き出したが、我々のダッハシュタイン登山のはじまりであった。

はいまつと岩のごろごろした道を迎って3時間でシモニヒッテについたときは一面に夕立雲が立ちこめ雷が鳴っていた。ヒュッテはオーストリア山岳会経営で素泊り20シリング(約280円)寺本はオランダ山岳会の会員だからその半額である。もちろんめしも食え、ビールもあるというのでまたビール。

小屋のすぐ横に小さな教会があり壁に「第2次大戦でたおれた親愛なる会員のために」と書いてある。たまたま一緒になったミュンヘンから来たひげづらの男は、それが気に入らぬらしい。我々を同志とみなし、オーストリアはもともとドイツ領でヒットラーが統一した時には大歓迎をしたくせに、今になって被害者づらをするのはけしからんなどとヒソヒソ声で云う。そのヒゲ男や、ハンブルグの若い男などから明日は一緒に登ろうと申し込まれ、充分時間があるからゆっくりしようと思っていたのに4時にたたき起され、4時半出発というハメになった。

シモニヒュッテからいったんカールの底に下り、それから2時間広い氷河の中を登る。氷河といっても感じは5月の潤沢と思えばよい。ただまわりの岩稜は